理系大学院留学生の生活とニーズに関する事例研究
－金沢大学留学生生活実態調査の分析より－

岸田　由美

１．はじめに

2003年，日本への留学生がついに長年の目標値であった10万人を突破した。量的拡大は質的な変化，出身の国・地域・社会階層の多様化，留学目的の多様化をもたらす。量から質への関心の移行とともに，新たな留学生政策，留学生教育制度のあり方が模索されている[1]。留学生教育もまた，変動社会における教育がさらされている今日的課題に直面していると言ってよいだろう。このような状況において，実際に留学生を受け入れ，教育機会を提供する各受け入れ大学においては，教育対象となる留学生の実態やニーズを把握することがますます重要になってきている。

金沢大学では，2002年７月から10月にかけて，全在籍留学生を対象に，基本プロフィール，入学の経緯，経済状況，生活環境，交友関係，大学生活とその満足度，希望進路等を内容として，質問紙（使用言語は英語，日本語，中国語）による実態調査を行った[2]。質問紙配布時の在籍留学生数は，学部・大学院（修士及び博士）の正規生及び非正規生と，短期留学プログラム等の学生を合わせて340人であったが，その内167人より回答を得た（回収率49.12%）。在籍340人のうち最大グループは理系大学院正規生（以降「理系大学院生」）である（142人）。今回の調査では，そのうち64人（45%）より回答を得ることができた。これは，回答者全体の38パーセントに当たり，在籍身分・分野別にみてやはり最大グループとなっている。

本調査に関しては，筆者は先に松下美知子（金沢大学留学生センター）と共同で，年齢等の属性別に，講義・ゼミ，指導教官，チューター，研究・学習環境，留学生活，留学生サービスの６項目について満足度の比較分析を行った[3]。その際も最大集団である理系大学院生を母集団としたのだが，本稿では，その理系大学院留学生とはどのような人々であるのか，その実像に接近し，留学の経緯，生活，学習の実態と，学習環境に対するニーズ等を明らかすることを目的とする。まず，学部生，文系大学院生，研究生といった他の回答者グループの傾向と比較しながら，理系大学院生の特徴について分析・考察する。分析にあたっては，さらに理系大学院生内部にある差異にも接近を試みるが，特に出身地域別の特徴については別に節をたてて考察していく。

分析対象は最大グループとは言え数的に限られ，あまり細分化して分析することが困難なため, 内的な多様性への知見については極めて限られたものしか提供できない。それにより，実際にはより多様で交差的な留学生に，極度に単純化したイメージを与えかねないことを危惧するが，実態調査の結果を踏まえることで，過去の個人的経験やメディアに流布するイメージ等からくるステレオ・タイプを排除し，一定の客観的な認識を提供するという意義はなおあるのではないかと考える。実際に彼／彼女等に接する教職員，日本人学生に対して，一定の基礎的な知見を提供することはできるだろう。加えて，留学生教育研究一般への貢献も期待できる。調査結果は当然在籍校の教育環境や地域性を背景としている。しかし，比較参照可能な他大学での同分析枠組みでの調査結果がないため現時点は明確には言えないが，以降の分析から導かれる理系大学院生としての，また出身地域別の諸特徴は，地方国立大学の事例として，また，大学とその所在地によらない集団属性に応じた事例研究としても，今後の研究に資するものを含むと考える。他大学で留学生教育に携わる教職員にとっても，何らかの知見を提供できれば幸いである。

２．回答者全体からみた理系大学院生の特徴

２－１．基本プロフィール及び留学の経緯

「理系」に分類される大学院としては，留学生の在籍者が多い順に，工学系，医学系，理学系，薬学系がある。文系同様修士課程と博士課程からなるが，文系大学院生に比べて全体に年齢層が高いことが特徴的である（課程別内訳は不明）。30歳以上の割合が56％という数値は際だって高く，結果的に，既婚者の割合も高くなっている（後述）。40代の回答者がいるのもこの集団のみである。留学前の身分について，職務経験者の割合が７割弱と最も高く，文系大学院生の場合と比べて，教師・研究者・医師等の専門職にあった者が４割を占めることが特徴的である。

留学先の希望については，日本が第一希望であった者が約６割と他集団に比べ低くなっている。一方，金沢大学に入学した理由として63人中16人（25％）が知名度や研究水準の高さを選択しており，これは正規生の中では最も多い。金沢大学そのものへの関心は比較的高いグループととらえることができるだろう。逆に，金沢という土地への関心や知り合いがいるといった大学の外部的要因に基づく選択は，他集団に比べて最も低かった。

金沢大学をどこで知ったかという質問への回答として最も多かったのが知人の紹介であった。回答者の57％が知人を介して知ったと回答しており，正規生のなかでは高

くなっている。逆に日本語学校の存在感がかなり薄いことから，個人的なネットワークがより重要な役割を果たしているとも考えられる。

２－２．経済状況及び生活環境

生活収入（表１）については，97%が奨学金を主たる収入源の一つにあげている一方，アルバイトをあげた者は39%と「その他」グループを除いて最も低い（平均45%，文系大学院生67%）。しかし，奨学金の受給額をみると，わずか１万円のみ[4]と回答した者が46%と半数近くを占める。また，アルバイトをしている者についても，月２万円までの収入しかないという者が33%と多い（文系では７%）。学部生も同程度の回答率だが，学部生の場合は仕送りがある者がいるが，理系大学院生ではゼロである。奨学金だけでは明らかに生活できない学生が多いにもかかわらず，後述する週あたりの登校日数の際だった高さに見られるような学習・研究にかける時間の多さから，アルバイトをしたくても出来ない，しても短時間のみという理系大学院生の困難な状況がみえてくる。加えて，次のような特徴は，経済的な困難をさらに感じさせる。理系大学院生の既婚率（63%）は文系大学院生（30%）と比べて大幅に高く，世帯で居住している者も５割弱に達する（文系では２割弱）。住居の形態についても学生寮や留学生向けの寮に住んでいる者は文系26%に対し13%にすぎず，ほとんどが民間のアパート等に住んでいる。世帯で民間アパート等に住むとなれば，家賃や食費，光熱費など，当然生活支出は多くなってしかるべきだが，その差は意外に小さい。文系大学院生に

表１　生活収入（複数回答）

上段：有効回答数 下段：%	回答者合計	奨学金	アルバイト	仕送り	貯　蓄	借　金
全　体	153	142	69	8	11	5
	100%	92.8%	45.1%	5.2%	7.2%	3.3%
学部生	34	31	19	5	3	2
	100%	91.2%	55.9%	14.7%	8.8%	5.9%
理系大学院生	61	59	24	0	4	2
	100%	96.7%	39.3%	－	6.6%	3.3%
文系大学院生	21	19	14	1	1	0
	100%	90.5%	66.7%	4.8%	4.8%	－
研究生	20	16	11	2	3	1
	100%	80%	55%	10%	15%	5%
その他	17	17	1	0	0	0
	100%	100%	5.9%	－	－	－

比べて自動車の所有率・通学時利用率が低く，対してバイク，自転車，徒歩での通学率が高かったことはその一例であろうが，多くの理系大学院生が，生活費を切りつめ「慎ましい」生活を送っている様子がうかがわれる。

以上より，経済的に困難な状況にある学生が比較的多いことが観察されるが，そんな時に誰を一番頼りにするかということについても，文系との違いが見られた。それは，指導教官の存在感である。文系では指導教官をあげた者は皆無であったが，理系では21％（割合として最多。研究生が14％で続く）が指導教官と答えている。文系と理系の特徴的な相違点としては，生活時間に占める大学で過ごす時間の大きさとともに，指導教官の存在感の大きさがあげられるのではないだろうか。

２－３．交友関係

交友関係をみると，理系大学院生は文系大学院生と比べて，日本人及びその他の外国人の友人については少なく，同国人の友人については多いという傾向が読み取れた。回答者の国籍数をみた場合文系では７ヶ国（うち５ヶ国が回答者１人のみ），理系では15ヶ国（うち９ヶ国が回答者１人のみ）であり，いずれにおいても最大集団は中国出身者である。回答者のみに限定しても理系で国籍の多様性がないというわけではなく，他国人との交流関係について言えば異なる研究科・講座間の交流状況[5]，日本人を含む交友関係の広さ一般に関して言えば，留学生や国際交流に関心がある日本人学生が幅広く集まる行事やサークルの組織状況などの影響もあるのではないかと考えられる。理系ではもとより自宅と研究室の往復という傾向が強いと思われる上，理系大学院生の８割以上を占める医・薬・工学系の大学院生の多くは，留学生センター，留学生課，大学や地域の留学生向け宿舎があるメインキャンパスから離れた別キャンパスで学んでいる。従って，交流行事の情報量，開催度は低くなっているのが実情であり，多様な留学生の交流の場となっている留学生用宿舎に入居している学生の割合も低い。これらの事情も影響していると考えられるだろう。交友関係の広がりをもたらす機会が少なければ，同国人同士の凝集性が高まってくることは自然と考えられる。

２－４．大学生活

先にふれたように，理系大学院生の登校日数は際だって多くなっている。週に５日以上登校するという者が98％（文系大学院生48％）で，６日以上，つまり週末も登校しているという者が７割を超える（同33％）。これが自由意思なのかどうかは判断する材料がないが，大学（研究室）と生活の密着度の高さは明かである。一方，講義への出

席率をみると，休むことが多い，ほとんど出席していないという学生は文系大学院生ゼロに対して19％もある。この休みがちな傾向を諸属性別にみてみると，この回答は母国で教師・研究者（構成比25％）であった者に集中しており，他の職業であった者にはそれぞれ１～２人，あわせても47人中４人しかいないのに対して，16人中８人にもなる。この結果自体はさほど意外ではないとしても，文系の元教師・研究者（構成比19％）にはこの傾向は全くみられなかった。研究活動に対する講義の位置付け，出席が要求される程度に分野による違いがあるのかも知れない。

講義・ゼミの満足度（満足度の尺度は共通で，「満足」「やや満足」「やや不満」「不満」の４段階）に関しては，「満足」の割合が高い（34％で正規生中最高）一方「不満」の回答率も11％で最も高かった（他は学部生で３％あったのみ）。特に元教師・研究者層に不満傾向が強く，「不満」が21％にも達している（やや不満をあわせると36％）。「やや不満」「不満」と回答した者があげた理由としては，そのほとんどが講義で話される日本語が分かりにくいとことであった。元教師・研究者には非漢字圏出身者の割合が最も高く（57％），言語の壁が大きいことが想定される。しかし，希望（複数回答３件まで）として日本語教育の充実をあげた者（16％）は英語による講義を希望した者（39％）の半数以下しかなく，これは文系での割合とちょうと逆転している。英語使用への要望の高さは理系の特徴の一つと考えてよいだろう。ただし，滞日期間による違いも観察される。１～３年の者と，３年以上の者では日本語教育の充実を希望する割合は前者で倍以上高い。滞日期間にかかわらず英語使用への要望の方が多いが，１～３年滞在の者ではその差はほとんどない。

関連して，非常に満足度が高かった指導教官に関しても，文系大学院生では皆無の英語による指導を希望した者が９％あった。また，留学生活の長さによるニーズの違いも観察された。全体では，希望の１位は「研究や勉強の内容・進め方について具体的な指示がほしい」（31％），２位が「研究や勉強の悩みを理解し，励ましてほしい」（18％）でその他が続くが，留学生活がすでに５年以上になる層についてはこの２つ以外の希望がほとんどなくなり，両者の差もほとんどなくなる。留学目標達成に向けて，具体的な成果に結びつく指導と一層の励ましが求められていると言えよう。

チューターの満足度は他の項目に比べて全体に低いなかで，理系大学院生は「満足」「やや満足」を合わせて７割強と最も高い満足度を示している。チューターへの希望に表れた特徴としては，文系では39％を占め最多の日本語学習の補助は16％しかなく，かわって文系ではゼロであった日常の世話や日本の社会・文化の紹介が専門分野の学習の補助と同率の28％を占めている点があげられる。文系では日本語と専門をあわせ学習補助への希望が約７割になり，学習支援がチューターに期待される主な役割と

なっているが，理系では日常の世話や相談相手といったその他の希望が55%を占め，チューターに学習以外での支援を期待する傾向が強い。

学習環境については，「満足」の割合が文系より大幅に高く，５割を超える。不満傾向を示した者の数が10人と少ないため背景をつかむことは難しいが，その内容として専門分野の指導が十分に受けられないことをあげた者が半数にのぼることには留意が必要だろう。また，希望としては，他分野の教官や学生の意見を聴く機会がほしいという回答が最も多かった（３つまでの複数回答で56%が選択）。この希望が特に集中したのは元教師・研究者である（73%が希望）。人的・社会的・文化的資本が少なく，特に行動範囲が狭くなってしまいがちな留学生に関しては，人的ネットワークの構築についても教育組織として配慮していくことが求められている。

２－５．希望する進路

留学終了後の予定については，すぐ帰国するという学生が48%で他のどの集団よりも多く，帰らないと明確に回答した学生は５%のみで最も少なかった。未定の割合が高いことは他集団と同様なものの，日本への就職について希望する者の割合も，18%で最も少ない。留学前の職業別に見た場合，元公務員，元教師・研究者については大多数が帰国を予定しているのに対し，元会社員だった者の多くは帰国の意志がなく，未定と回答している。一方，希望する職業をみると，元々その職にあった者の割合（25%）を遥かに上回る70%が大学・官公庁での教育・研究職を希望している。企業の研究職を加えれば研究職希望が79%となり，研究職への「キャリア･アップ」をねらっていることがうかがわれる。元公務員や教師・研究者については帰国後のポストが保障されている場合も少なくないだろうが，その他の者にとっては，「どこで」よりも，「何を」するかが重要になっているのではないだろうか。

２－６．留学の満足度

金沢大学での学習研究生活については，「満足」と回答した者の割合が48%と正規生のなかで最も大きい。しかし，「やや不満」「不満」と回答した者も11%はあり，少ないとはいえ留意すべきであろう。また，大学の留学生サービスに関しても，「満足」が41%とやはり正規生のなかで最も高い満足度を示している。２－３．交友関係の項で述べたように，留学生に特化した情報提供や行事の開催，宿舎の提供という面では，理系大学院生はむしろサービスを受けにくい環境にある。「留学生サービス」というとそういったことに目が向きがちだが，それ以外の，より一般的なサービスが評価されているということなのかもしれない。何が満足度を高めているかについて明確に示す

回答項目は今回設定されていなかったのだが，これまでの分析から，指導教官との関係の近さにみられたような一般的な教育指導や学生サービスの働きを想定することは可能であろう。教職員の目が届く距離に学生が，学生の声が届く距離に教職員がいる，ということは，留学生に限らず教育一般の理想形態である。そのような機能がどのような経路で，どの程度働いていると言えるのか，さらにどうしたらよりそれを高めていけるのか，留学生の独自のニーズに対応する専門的サービスとの連関性とあわせ，検証していくことが望まれる。

３．出身地域別の特徴

国籍について地域ごとにみてみると，東アジア38人，東南アジア11人，南アジア５人，中東４人，アフリカ３人，欧州１人という構成になった。そこで回答者数の少ない後４者をまとめ，＜東アジア＞（38人），＜東南アジア＞（11人），＜その他＞（13人）という３つのグループに編成し，それぞれの回答傾向から特徴的かつ教育指導上留意すべき事項について取り上げていくこととする。

３－１．留学の経緯

私費留学生の割合については，地域ごとの違いが明確に出ている。＜東アジア＞では95%と圧倒的に多いのに対して，＜東南アジア＞36%，＜その他＞36%であった（図１）。東アジア出身者（主として中国）は日本留学生の最大グループであるため奨学金の競争率が高いということが背景として考えられるが，私費でも日本に留学しようという学生が多くいるということを示してもいる。つまり，日本留学の牽引力は，東アジア地域以外では比較的弱いということであろう。金沢大学への入学理由をみても，私費留学生の少ない＜東南アジア＞・＜その他＞については，本人の意思以外の要素である協定関係や割り振りをあげる者の割合が少なくない。＜その他＞に関してはそれが最多回答であった。対して＜東アジア＞の場合，他にはみられない理由として，金沢という場所を重視して選んだという者が27%もあった。これは先に理系大学院生において最も少ないことを指摘した選択理由であるが，東アジア出身者に限っては,知り合いの存在等の人的コネクションが確かに働いているようだ。金沢大学を知った経路についても，＜東アジア＞では82%が知人の紹介をあげている（他では18%以下）。

３－２．経済状況

この私費留学生における東アジア出身者の多さは，私費留学生向けの各種奨学金の獲得競争も厳しいことを意味する。結果的に，奨学金受給額として月に１万円のみと回答した者の割合が，＜東アジア＞62%，＜東南アジア＞18%，＜その他＞31%という結果となっている（図２）。逆に，15万円以上受給しているという学生はそれぞれ６％，82%，62%で，出身地域別の格差は大きい。また，指導上留意すべき事柄としては，奨学金の高額受給者が多くを占める＜東南アジア＞・＜その他＞のグループ内にあって奨学金をほとんどもらうことができないでいる学生については，なぜ自分だけが，という形で不満が高まるおそれがあることを指摘しておきたい。

この格差は，生活支出に反映している。世帯居住者の割合では，＜東アジア＞53%，＜東南アジア＞30%，＜その他＞62%という率であったのに対して，月８万円以下で生活していると回答した者の割合は，それぞれ68%，９％，15%，14万円以上の割合はそれぞれ３％，27%，62%であった。図３は一人暮らしの者について，図４は家族と暮らしている者について，それぞれの生活支出をグラフ

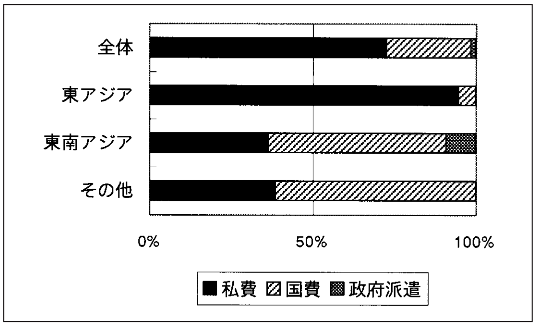

図１　出身地域と留学形態

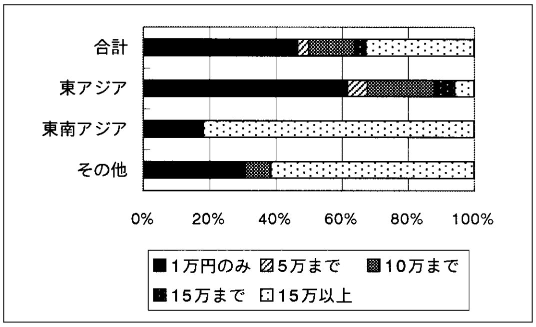

図２　出身地域と奨学金受給額

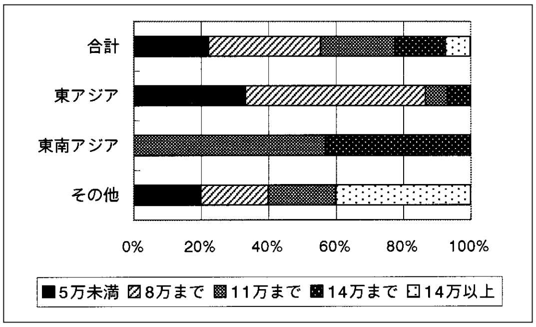

図３　出身地域と一人暮らしの生活支出

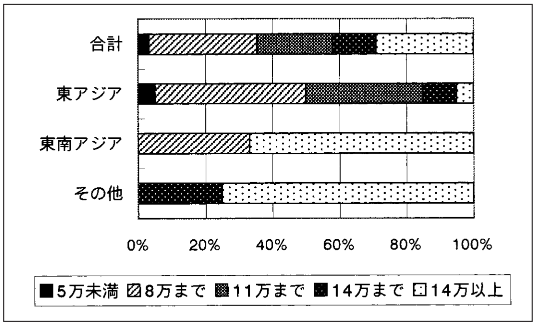

図４　出身地域と世帯居住者の生活支出

化したものであるが，いずれの場合でも東アジア出身者がかなり少ない費用で暮らしていることがわかる。

３－３．大学生活

「全ての講義に良く出席している」と回答した者の割合について，＜東アジア＞81%，＜東南アジア＞46%，＜その他＞46%，「休むことが多い」，「ほとんど出席していない」という回答を合わせた割合では，それぞれ５%，46%，31%と，東アジア出身者の授業出席率の高さが観察された。しかし，講義に出ないことが，そのまま勤勉さに欠けるということにはならない。週６～７日，つまり週末まで大学に来ているという者の割合をみると，＜東アジア＞60%，＜東南アジア＞82%，＜その他＞92%となる。経済的に安定している学生が多く来やすいということはあるだろうが，講義にきちんと出席するというのとは別の意味での「勤勉さ」を，他地域出身者は持っているのかもしれない。

＜東南アジア＞と＜その他＞については，講義・ゼミに関する満足度評価においても，不満の傾向が高くなっていた。「やや不満」「不満」の割合として，＜東アジア＞８%に対して＜東南アジア＞18%，＜その他＞42%である。＜その他＞については，学習環境についても31%と比較的高い不満傾向を示した（＜東アジア＞14%，＜東南アジア＞９%）。＜東南アジア＞についてはさほど不満がない割に出席状況が悪く，＜その他＞については不満も多く出席状況もあまり良くないということになる。これは，２－４．でふれた理系の傾向，元教師・研究者の傾向からも説明しきれない[6]。＜東アジア＞に比べ数が少ない＜東南アジア＞・＜その他＞の留学生については分野，講座が限られるということも考えられるだろうが，研究分野の違いのみに起因すると

表２　出身地域と講義・ゼミへの希望（複数回答３件まで）

上段：有効回答数 下段：%	回答者合計	専門分野の教育の充実	専門分野の基礎教育	日本語教育の充実	英語による講義	ディスカッション・発言機会の増加	教授法・指導法の改善
全　　体	58	38	24	10	21	14	20
	100%	61.3%	38.7%	16.1%	33.9%	22.6%	32.3%
東アジア	38	28	16	9	10	11	13
	100%	73.7%	42.1%	23.7%	26.3%	28.9%	34.2%
東南アジア	10	7	5	0	4	1	5
	100%	70%	50%	－	40%	10%	50%
その他の地域	10	3	3	1	7	2	2
	100%	30%	30%	10%	70%	20%	20%

も考えにくい。母国の価値・規範の影響も考えられるであろうし，日本語力不足に起因して，出席しても内容がよく分からないから，ということも考えられるだろう。

言語の問題は特にグループ間で違いが大きいようである。講義・ゼミへの希望（表２）からさらにグループ毎の傾向を読みとってみよう。日本語教育の充実は＜東アジア＞以外はほとんど希望しなかったのに対して，英語による講義は，＜東アジア＞26％に対し，＜東南アジア＞では40％，＜その他＞では70％の者が希望した。＜東アジア＞と＜東南アジア＞で最も希望を集めたのは専門分野の教育の充実で，それぞれ74％と70％が希望したが，＜その他＞の場合３割以下に留まっている（その他の選択肢も全て３割以下）。この英語へのニーズの高さが＜その他＞の特色と考えらよう。指導教官への希望（１つのみ選択）に関しても，＜その他＞では英語による指導が27％で最も高くなっていたが，これは他グループでは少数回答であった。＜東南アジア＞と＜その他＞は，いずれも日本語習得が比較的困難とされる非漢字圏に属するが，＜その他＞の方が，日本の言語環境，教育環境への適応により困難を感じ，不満を抱く傾向があるのではないかと推察される。

指導教官への希望（図５）については，東アジア出身者の特色も読み取れた。このグループでは46％が「研究や勉強の内容・進め方について具体的な指示・指導がほしい」と希望したのに対して，＜東南アジア＞では20％，＜その他＞では皆無であった。中国出身の学生の特徴としてこれまでにもしばしば指摘されてきたことだが，自主性や創造性を期待される日本の研究指導スタイルに戸惑っている様子がこの数値に表れていると考えられる。

金沢大学での留学生活全般の評価は，満足傾向を示した者が９割と良い。最も高いのが＜東南アジア＞で，「満足」が73％，「やや満足」が27％で不満傾向を示した者はなかった。最も不満傾向が高いのが＜その他＞出身者で，「やや不満」，「不満」が23％となっている。一方，大学が提供する留学生サービスに関しては，「満足」と回答した者の割合が最も高いのが＜その他＞で58％であった。しかし，不満傾向に関してみると，＜東アジア＞11％，＜東南アジア＞０％，＜その他＞17％となり，やはり東南アジアが高い満足傾向を示している。全体を通じて，＜東アジア＞以外は十数名と調査母集団が小さいため，どうしても個人差が大きく表れてしまう。その背景を集団属性に結びつけて推察することには限界があり，今回の調査ではどのグループに不満が表れたかの指摘にとどめざるを得ない。

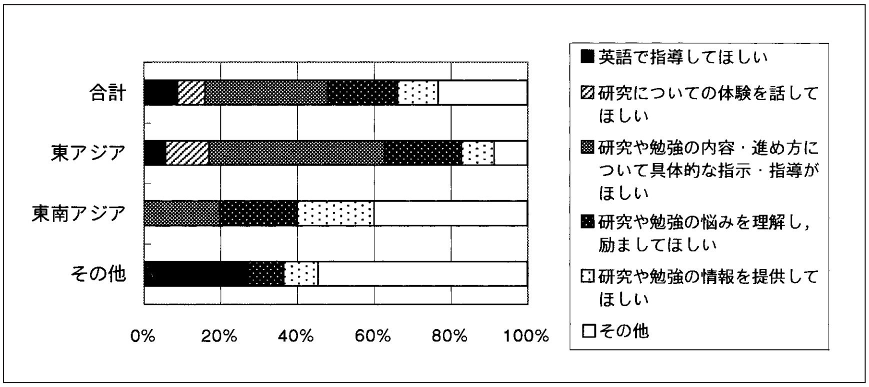

図５　出身地域と指導教官への希望

３－４．留学後の予定

留学終了後の帰国予定についても顕著な差がみられた。すぐ帰国すると回答した者の割合について，＜東アジア＞34%，＜東南アジア＞73%，＜その他＞62%となっている。では東アジア出身者にはその後も日本に留まる予定の者が多いかというと，その割合も３％と最も低い。未定と回答した者の割合が55%と飛び抜けて高くなっているのである。この牽引要因としては，２－５．で帰国予定者がほとんどいないことを指摘した元会社員の８割が東アジア出身者であることが大きい。日本での就職希望に関しても，希望する／しないいずれの回答も他グループより低率で，「わからない」が42%を占めている。自由記述からは，希望しないとした者も含めチャンスがあればしたいが難しいからといった，可能性を求めつつその困難さも認識し，揺れているという様子が読み取れた。第三国への移動も視野に入っているのだろう。金沢大学大学院修了生として日本の職業市場へ，あるいは第三国へと出ていく潜在的可能性は，東アジア出身の元会社員に最も高い。

４．おわりに

これまで指摘してきた諸特徴のなかでも，特に今後の留学生教育に示唆的な事項について確認しつつ，まとめとしたい。

文系大学院生に比しての，年齢層及び既婚率の高さ，世帯で暮らしている者の多さが確認された。しかし，その生活の基盤は不安定な学生が多い。特に東アジア地域出身の学生については，他地域出身者とはまったくその構成を異にし，私費留学生がほとんどである。奨学金の受給状況を見ても，他地域出身者ではその７割以上が月15万

円以上受給しているのに対して，東アジア出身者では逆に１万円しかもらっていない者が６割以上を占める。この経済格差は非常に大きい。アルバイトもごく限られた時間しかできないため，東アジア出身者は，単身者はもちろん，世帯で暮らしている者も，他地域出身者に比べ大幅に少ない生活費で暮らしている様子が確認された。アルバイトをするのが難しい背景の一つとしては，研究に割く時間の多さがあげられる。講義への出席にかかわらず毎日大学に来ているという学生がほとんどであった。このような生活スタイルのなかでは，指導教官や所属研究室との関係が社会関係の大半を占めてくることもまた自然であろう。文系に比べ頼れる相手としての指導教官の存在感が大きいことが観察された。また，専門の研究に費やす時間の多さの裏返しだろうか，文系に比べ日本人や他国人との交友関係（行動範囲）が狭い傾向があると同時に，他分野の教官や学生との交流を望む声も大きかった。

理系大学院生の特徴として，英語による教育・研究を望む声が比較的多いことを指摘した。これは特に東アジア以外からの学生に顕著な傾向で，東南アジア出身者では４割，南アジア・中東・アフリカ等出身者では７割が希望している。この両者については，ほとんどが週末まで大学に来る一方で講義は休みがちな傾向も確認された。特に後者については講義･ゼミ，学習環境への不満傾向も高めで，同じ非漢字圏ではあっても特に日本の大学の言語環境，教育環境との間に葛藤を感じていることがうかがわれた。一方東アジア出身者の場合は，講義等のフォーマルな学習を重視し，指示的な研究指導を好む傾向があることが観察された。

はじめに述べたように，今回の調査結果から導かれた以上の諸特徴はあくまで一事例の域を出ず，どの程度の一般性を持つかは今後の検証を待つしかない。他地域，他大学の場合との比較考察も不可欠であろうし，今回充分接近できなかった仮説的部分には，質的調査も含め継続的な研究を行っていくことが望まれる。これらは，今後の課題としたい。

【付記】

本稿は，生活実態調査の結果をふまえての分析・提言集（2004年3月発行予定）作成と同時進行で執筆したものである。本稿に関しても，分析･提言集の共同執筆者である松下美知子氏（金沢大学留学生センター），宮崎悦子氏（金沢大学経済学部），中崎崇志氏（金沢大学非常勤講師）との意見交換の成果が生かされている。

【注】

1　中央教育審議会は2002年11月より新たな留学生政策の検討を始め，2003年10月７日に，従来の受け入れ中心の政策から，送り出し，日本人の海外留学支援政策の強化へ，また，受け入れにおいても量より質を重視する政策へとの方向性を示す中間報告（「新たな留学生政策の展開について（中間報告）～留学

生交流の拡大と質の向上を目指して～｣）を提出した。

2　回答者全体の調査結果及び質問項目の詳細については，金沢大学留学生相談・指導専門員会編『金沢大学2002年留学生生活実態調査報告書』（金沢大学留学生センター，2003）を参照されたい。

3　岸田由美・松下美知子「留学満足度に関する事例研究－金沢大学留学生生活実態調査から－」『異文化間教育学会第24回大会発表抄録』2003，54－55頁。性別，年齢，留学期間，言語（漢字圏，非漢字圏），奨学金受給額，婚姻関係の有無，居住形態（世帯／単身），留学前の身分（学生／有職者），日本人／同国人の友人の多さ，大学選択理由別にグループ分けし，満足度を比較した。結果として，比較的明確に差が現れたのが日本人の友人の有無であった。日本人の友人がいないと回答した者と，いると回答した者では，すべての満足度評価項目において，いると回答した者の方が高い満足度を示した。

4　これは県の奨学金として，留学生全員が申請により受給できるもの。

5　特に理工学系の大学院はその規模自体が大きく，分野ごとに研究棟が異なるという事情もあって，文系に比べ同一研究科に所属する学生同士でも分野が異なると接する機会が少ないということは考えられる。

6　欠席しがちな傾向の強い元教師・研究者についても，休みがち，あるいはほとんど出席していないという者は，＜東アジア＞17%に対し，＜東南アジア＞100%，＜その他＞60%であった。

A Case Study on Campus Life and the Needs of International Students at Science Graduate Schools : An Analysis Based on Date from *a* “*Survey on the Actual Circumstances for International Students in Kanazawa University*”

Yumi KISHIDA

Abstract　Today, Japanese universities accept more than 100,000 international students with diverse needs from diverse background. To be accountable for the quality of education it is becoming more and more important for university stuffs to know ‘who’ their students are. The purpose of this paper is to illustrate some part of the lives and the needs of international students belong to science graduate schools analyzing the data from *a Survey on the Actual Circumstances for International Students in Kanazawa University*, 2002. The number of target respondents is 64 (45% of total enrolment); 38 of them are from East Asia, 11 are from Southeast Asia, 13 are from the rest of the Eurasian and the African continents. Firstly, this paper examines the feature of science students mainly through the comparison with arts students. Then, it approaches the difference among science students depends on their national

or cultural backgrounds.

Science students are older than arts students. More students are married and live with family. It is natural for them to need more life cost but their financial sauce is more limited. The number of students who have part-time job is less and they earn less money. Financial problem is especially critical for East Asian students. Almost all of them are self-supported and more than 60% of them get only ¥10,000 scholarship par month while more than 70% of students from the other area getting more than ¥150,000. Consequently, East Asian students live with much less money when they live with family as well as when they live alone.

Science students do less part-time job probably because they have less time for it. Most of them come to campus every day include weekend. Such lifestyle leads their tendency to have stronger tie with their supervisor and have narrower social relationship than the case of arts students.

They tend to find more difficulty in language used for study. It is stronger tendency for the students other than East Asian and the strongest for students who are not East nor Southeast Asian. 40% of those students are not satisfied with the present lecture mainly because Japanese used in the class is not easy to understand. 70% of them want to be taught in English. Southeast Asians are not familiar with Chinese character, either, but less complain about it. On the other hand, most East Asian students much more punctually attend and satisfied with lectures. However, they distinctively request their supervisors more instructions on what and how to study.